



取
 重
 類
 從
 四
 卷

增
 775
 218



775
218

群書類従巻第百三十

檢校保巳一集



紀行部四

海道記

源光行



白河乃流の中山麓に宗廟の院とありて性淑なり
底のりまて社をむらひ氣をいつたをむらへしは身
運のりありて為けまて新ひとらり合とかりしみて
うみ瓜のさおるにありて後に貪泉の帳幕とふ
くして勇と藤ありてちうくありて糸のありてむ
りく霧谷の埋木とて意樹ふむとらりけり
らぬ合とらりてけりては投身の園の胸の聲ふ

淡く好らりかひのこころにわたりわたりあきと
断腸の棘も愁乃中に散るをて歎とめて際ふ
飲心もふ伯夷の噴にあきと色ハ人ぞやうをて秋ハ
葉を捨て食ふ病とりやと疾子う葉もいもいれり
とて泣きぬ九夏三伏の汗に拭てらるるも手
に扇あきて涼を拓くも一ひもやと一まをふ
何じに泣くにあきと色ハ人ぞやうをて秋ハ
物とくはるく何一室乃量も集る秋ハ月ハ晴る
あやめをそとあきと色ハ人ぞやうをて秋ハ
とわらきと心ハ常ハ醒るたるもつと愛と志とんぬ
世乃威の水もやう流きて生涯らるるまらんぬ

あきとすきともあきとらるるのよらむの流車あきりか
竹の池苔の池を日月はあきとの波の初まうみの影
対極とあきぬ霜ハ飛渡子をたふ白線とあきと色ハ
にぼりて佛のうへにいとこころをとりをて鶴
鬚のやうに早落といふ秋病もあきと色ハ
いとあきとあきとあきとらるるに候とて情とあきと色ハ
何ぞもあきとあきとあきとらるるに候とて情とあきと色ハ
あきと色ハ樹の葉ハ熱もあきと色ハ
と法衣の色をみかて衣のうらむ玉の影もあきと色ハ
只あきとあきとあきとらるるに候とて情とあきと色ハ
あきとあきとあきとらるるに候とて情とあきと色ハ

くもも佛と云ふる思は違ふと云ふる四龍乃にわを
等り一も一龍の瓜頭龍乃にたもまのたむとん小
そのまもわをといひむむむむむむむむむむむむむむ
禪の忘れしとて然る曹晴の酒と人と云えりてより
か子穿る駒と心は終て力の業とまの病眼のむむと
夫命は終る杖つきて歩とたもく摩牙のハか
をまもも地衣乃水ににらるゝと渴とらるむと元勝
一盞のうむむむむむハ餘味ありと薄紙百俵の衿をに
勝るハ恥をわくむむむむむむむむむむむむむむむ
也家乃為ありつゝつとつとつとつとつとつとつとつとつ
作相模國鎌倉の郡と一界乃唐源範大納の築満

が初と武將の柿とある百葉の末方にむむむむむむむむ
及にまをり百歩の柳百をむむむむむむむむむむむむ
似より一張をいせりて胸とむむむむむむむむむむむむ
おとく定人をまてく腰とむむむむむむむむむむむむむ
山とあつと雉伏と極喜手にむむむむむむむむむむむむ
千丈威といはくくくくくくくくくくくくくくくくくく
張りまむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
赤目にむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
還るむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
現れハ万緒の楳のむむむむむむむむむむむむむむむむ
まとのむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

くく白とて送るや心乃ゆの洋乃に漕りて海道
万里乃流小掉さるる葉馬あつ浦にたふらん関山
千程のせいにむらうらん今便人の芳縁にまゝ一
俄に独乃乃をりて合り貞應二年卯月の上旬交
小都と出て一期に橋立のりいまみとていりかじ
者乃まゝも今立つらまは名流州く見えん志
ら一知もく人も種の一忠的ゆいあ人をていつま
あもりの坊乃とあたりいたとてゆめ坂ふかき
と九重の宮城ハ水のこにくれ又お坂と下り松を
よりしてさけハ西天河原のつりいまのめは海りぬ小
男とれ執る津乃うらうとてけり宮乃門とてた

くくくまの金剛力士念怒のつる眼と結り一坂田の橋
とあふ流もハ白浪流落く流行とありま又力とて
やと湖上たゆりとのそあハ公興一のり野をたを
ゆとあてまた教とらあつ流よりゆとた都とをたへ
そとぬ前途林樹の終よま新橋ふるる後流山より
て白を流とつらむ既ハ斜湯系とまて晴ぬあさうた
登らんく流袖衣あわのそくぬて旅のあもまをあらぬま
乃山殿あけくあよりとて曉乃望兼くまき櫻高早
子巖の流をうはみ水はせとて又水たゆむ波の浪深
長堤の河よりむ瀧水の橋下にはは津とらあひあ
く流くくあへ流見関のち記やにいあぬを抄とて

とやまよふ人の心のとらふ山みたりは林うきたけくまて
秋葉よふ葉のしるふふまなる年流うりのかゝるぬまに
ゆよあひひしりて候とそりちまはしつらうか
まらひ福をりもあそ被盧山乃翁唐の秋曲を情
ある年と樂天乃詩を感一はた大岳の茶のあはる
に何年とあはたのあまを月

黒深乃水がしるは霧の月りう一とあそあまの
わりのあそをきてきた川は内乃白河の白河の
あそをきて珍麻山あがる山よりハ伊勢流まうり
つりぬま山まうり一越まハ子丈乃唐風流まけく
群樹稠る一暮と又り乃乃帷帳まはくあは

峯にハ松風ふくは朝へて秋葉う姿あまの年
林にハ葉花掃ふあて蜀人乃錦ハ終るあまの
のまにあは山形乃夏の色ハ松のまうりにあかけ
樹津の色は雪の谷のまうりふた松と何里まも
らハ越のり羊腸坂まうり一と馬馬をうあ
あそをりまへて秋山ハ山の中にあ山とあそま
嶽の峯にハりり一河のあまは百瀬流て衣客乃あ
みふととむりとり山里江樓ハ高嶺あつと
あまのり者ハあつとむりうり
とく川あまをくけおはあまてあせは浪をうり
流常に珍麻の穴をハあまの月のあまをうり

虚ろのうららかに由厚路ののりり下流乃あ谷下流寄
箭をみやうして序の他なるるよめりる家よ流澤の
よか子て枕を肩縁の夢にむらひを衣脱よむり
袂をいん子清あをけく世ハお子の世をさすまて天乃
ししくおあつと竹を吾文志号あまハかをたゆして
よんある

吟麻山てゆり里のひ孫の若松のまよれとえとふ
六日孟嘗君のわらわ家よあうこまハ函谷の難乃後
夜をあうてまの半のあうこまて流りまハ巖扉あ
つこかきり仁者の柄あつたりし樂々洞水垢あふん
智者の初うこまをともたけうかりかて色里に出て

田中清時を海まはたはんちよ見立田妙とあり或ハ
耕一をのまうむあうこま論一由師あせを並く苗を
沢よりくよ藤より民のけゆとハ父君の神の思火
よりにはまひ王乃の世ハ子民稼穡の士勤より野あ
より水龍のゆり福穀を護てまのむとこ一電
えい子てより九徳とまうみて三秋とま川東地の葉
カとらままは西収の祀ありこまを劉寛の刑と
志きたり蒲穀定て雲よなりぬらん

苗代のおにはけりてるあふいお家のまは清秋のゆりけ
日敷あうこまはなをまうこま三埒りさゆる法をみまハ
しりまのゆりまうあまよりゆらなるものゆりゆ

出て夕入東西と日乃光小川とさういふも船は
と海にのまはま屋敷と家令に福せん事か
そのつらう一歩と控て新歩とさういふをさうき
あつて往還と記しはし一と共あつてむをた記
郡の中路とてお後乃おひひと方なる事と

方里においづくに海とさういふ船のさういふ
祝儀と市脚とさういふ船の前とさういふ海へ入
河伯の氏とさういふ船にやとさういふ船とさういふ
山祇乃船風とさういふ船とさういふ船の浪にお光の舟と
ゆつてあつてかく船乃龍の船乃船とさういふ船と
あつてさういふ船とさういふ船とさういふ船と

初まは打ぬ

松子のいづく破のおみ船の舟とさういふ船とさういふ
七日市脚とさういふ船乃船とさういふ船とさういふ船
の舟とさういふ船とさういふ船とさういふ船とさういふ船
浮きかたに海へかくさういふ船とさういふ船とさういふ船
とさういふ船とさういふ船とさういふ船とさういふ船

さういふ船とさういふ船とさういふ船とさういふ船
酒とさういふ船とさういふ船とさういふ船とさういふ船
りたつて船とさういふ船とさういふ船とさういふ船
まて流とさういふ船とさういふ船とさういふ船とさういふ船
あつて船とさういふ船とさういふ船とさういふ船とさういふ船

園より傍側より新御を帯て農業を成すむ大なる
先きの小を説くし人も回と習ふをうたふ足とひら
うことほのちのひのみあつてうへうり業を習ふ
あつて海ありまはたしそと云き実にたええりうり
しまへいしよはの者のまをのほつあひあつたり

山向うの卯月にはまじの門のひのやまをわらふ

園月宗ありしを後て旅店ふ人よりぬきし宗のま
くうとてうりて萱汁の煮ふたまのま

八月萱汁とてうりて海り浦ふまぬ惣田宮り御前とて
まは示現利生のまはつらむ海川とて一公再ねり詳
候りぬとめくふく昔くちる旅にひしてり字つと

説きまは権現の御しとて人衆光のまに口又ふ本
新説くまは松風天に吹とていとも靈蹟日新なり
人中の公衆まのまはくはむけりありあつたりと
林の枝枝とてうりて幡蓋社次の上におひし金むの権
猫とて川合とて神殿り向ふうりて彼初光田を
木陰とてうりておひし事をと佛ひ羊俣未希の後悔
よ向茶のうりてみありて後茶の未希に向方とてこのひ
然い今日の深茶とてもちて必高茶の良縁とてん路次
の便詣ありていふ事ありては誠感相計けし先
ありい雲とて舟摺ひありて神定てその名を
路く長教の的院に神ありてみありとて

先づのよきおとすのたやめあはるるわが心はたれをえん
晴うとせらるるうたのまにわすし入海してあふあふとハ
海へうは雲は塩干海あまはるるとせらるるわが心はたれをえん
天ハ深海深くしてせらるる中とハ一
葉の舟あはるに飛して日日の舟あはるの舟は舟の舟
中にて舟あはるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
とせらるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
も是年より舟あはるるわ

まがしとせらるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
程は干海程にして舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
まがしとせらるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
まがしとせらるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

先づのよきおとすのたやめあはるるわが心はたれをえん
晴うとせらるるうたのまにわすし入海してあふあふとハ
海へうは雲は塩干海あまはるるとせらるるわが心はたれをえん
天ハ深海深くしてせらるる中とハ一
葉の舟あはるに飛して日日の舟あはるの舟は舟の舟
中にて舟あはるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
とせらるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
も是年より舟あはるるわ

先づのよきおとすのたやめあはるるわが心はたれをえん
晴うとせらるるうたのまにわすし入海してあふあふとハ
海へうは雲は塩干海あまはるるとせらるるわが心はたれをえん
天ハ深海深くしてせらるる中とハ一
葉の舟あはるに飛して日日の舟あはるの舟は舟の舟
中にて舟あはるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
とせらるるに舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
も是年より舟あはるるわ

其の親色に友をさしきて
つあるまは心ある者にも
申ひて漢文の物と征揚波
らみといふもいふも
あそおのさあもまたいふも
かりしきしき

病の身をたたく
湖邊のつらふ
田の程息い
うまめこそ
山のまとも
あまはた書
いんとま
海の子
一時の
あまはた書
いんとま
海の子
一時の

あまはた書
いんとま
海の子
一時の
あまはた書
いんとま
海の子
一時の
あまはた書
いんとま
海の子
一時の
あまはた書
いんとま
海の子
一時の

おははるのうへつゝん相如うせぬうみへ一八飛ぶ小宗
て昇僂ふかへつゝぬき勇と捨ふ窮ちたぬて高橋を
渡ふ高橋よ高橋よくもくも物知りふ人こそ若もさうや
橋ねはけしうし流ふとのきも打ぬらむのしう折
ぬりもの八合とまひてこ

すみとむしてさうさのやう橋と高橋とさうもさうかつゝや
ぢうぢう人さうさうとらあひて打ぬらむのしう折
心もたぐはよおぢえてさうさ高橋とさうもさうあつゝ
教ぬのさうさ一板たけて流り一八のねしめて海へ
あつゝのうらたむしうとたつひてここのさう一八合を
あつゝ

高橋の所りさうさ心もたぐはよおぢえてさうさあつゝや
あつゝのうらたむしうとたつひてここのさう一八合を
あつゝと際斜御殿も固合たをたぐひ目の入流も高橋の
あつゝ高橋とさう

九日高橋をまて赤坂の宿とさうさ一八のねしめて海へ
あつゝのうらたむしうとたつひてここのさう一八合を
あつゝと際斜御殿も固合たをたぐひ目の入流も高橋の
あつゝ高橋とさう
あつゝのうらたむしうとたつひてここのさう一八合を
あつゝと際斜御殿も固合たをたぐひ目の入流も高橋の
あつゝ高橋とさう
あつゝのうらたむしうとたつひてここのさう一八合を
あつゝと際斜御殿も固合たをたぐひ目の入流も高橋の
あつゝ高橋とさう

舞姫怒う人つとて昔教の禊とあり 長城釣湖の程
仙は晝夜持陣忽ち智りの法より巨唐よ本を
あまて中釣ふ巻とありと人城に貴流ういん初
幾分のた入野ありとく已別中本伝のせよとて人
と化さるたあしきやわらふ言と流して程といまた
あらしきむ

いづれとてはうみらと考へて 夏野ありはあかり
かくて中野うねとて守とて彬うりし蕨の春の心とせ
哲のそと地のちうとくまもふ約を麻もも思ゆ
けよ白きふよかきまそ月早遅く影まぬ晩とてあつて
老河の若くはあつぬ深夜よまてみまはは川あり

まじりくちあゆくとしてゆへにゆへにあり後し河の
ふねよ流る浪の春八月の光よあそり川急ふと流
風の響ハ秋のま白く又うねいむかのそみよ八月
よりわりにあつぬあまてふとてあつ

ちり人よあまは小浪のちりねとあまにけ月の新さう
十日老河とてまて野らまてまらんとすくまは筆
野のあつとあまの田畑のあつあつりかて春木のあつ
のわらとあまの筆は松風よとて山のそとまじり
深きりまをたは感心情はらめて

山の福の家より春たうつとまて野まのあつゆりまのあ
やうとてあまのあつぬを利と踏て大歌山と打るま

鏡燈うぶに草葉有せてあそぶの色糖とあく竹林地を
登りぬハ山中に坊川ありともよりを流すうはりぬ
くろくくたつとくせんのわらぬひのあつとあのを
たふのあくと南ふくくると登るをわらせしき海流こり
て白き流きたり海との眺望はたつありに晴きこり
洲山仰よりきてて匿穴はくくた地合たる谷またあり
力とたつとあつと考てりりくくるともハ小の禱象
地性の相見のをもなるをみ察して南に流蘇庵舟は
泊り波の声々乃冥に集りふ松をいかに記たりあり
飛舟とあひひくとけ大のをけ行はくまり演路ハ交する
うハ消界くあまりて数條の畝滅くまり流よりの

みの光ハ心からきとも思白とまきまきハ白洲よきとる踏
を心あきとも毛砂はゆくとく候身くともあきとる踏
くまきハ坊浦の系統ハくくく人ハ人の心とまきま
けきり神も垣倉のけきりたつともあきとる踏
ハ揚の勢乃中に橋本の者ふとまき坊浦ハ麓海南に
法て松舟をあらぬくくくたのせ澤流くくくく
峯号と演名の橋くくく河く日車西く地て牛漢
漸あくくく月物草よりて先帝初て函あり浦
かく松風ハ仰もあくくく松の男けくく巖とあくく
浪の着ハ岸もあきぬむの舟はを川初文のるくく
りのくくくくくくく七編のあきりりりり

とらふも深瀬はあふみのう海ありつじしん国を
て数双の雲は下小きくは硯さうりより波は水にか
まひきくくのあきも情さうけく月おきのうん
衣せかゆゆりてあひあふすく波釣魚のをいあみの
唐に入て魚のさごとく一物あつ稗りうさうくら
流う人にあはきもそ客う旅をよよめあふれも既に
のゆあし早はむりといわらまておまふ人今想はるく
修布あつ夢にようまきとあふぬなりうりはきと
出川あらうく旧橋よまをゆりてむつじさうり
奥あまの橋のたはさうあつうはあつぬ水とか
一とさ海あつと雲さうふ風のうらあつり

せのえそやうひまもさうはあふい薪中の猶若ハ坊
所よ儲をり難う水潭の流とひん
橋あやあふぬ海とあもねさうのつまのひん
浪まうらうくおのあうに河ひをらぬのうら
ちりよ橋本を河橋のさうりよりわさうらうあみ
まは流あふあみのうあはさうあありとよひあ
路ふま松の枝とあひじもまをけしじわはうん
まは湖とさうらふうのんてあみのあは水の勢も
こ西たのを免は湖海じりくくむらりておまはうん
風のたくらまは水あつさうかきもさあ
けまも湖海乃淡鹹ハ氣味あまはとさう地の人

に海に蕪みさしす〜さあをめぐり舟の中に
唐櫓おとこ秋のうりせあり光そなほをたたく
布より奥の縁中にあきこ感賜ききりにりて
ありひやかく〜坊前とらすきと濱のうらに
きりぬ長江砂渚〜ゆき入るあ〜新株
あ〜と月波をを〜せふとみきハ又湖と春
と別世浦のあり吐玉〜濱崎珠と沙汰と別
る〜春のきよ〜た〜く優りりり影ありり
馬那くあ〜〜合め〜ハ〇年り再ひあて此
う〜にす〜ん

波は海雲に風のう〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

林乃風よとくらま〜廻澤乃や〜海〜ん〜ん〜ん
〜とゆ〜岳乃色〜〜いりあり〜澄糸ハハ次あり
幸には月あ〜ねと〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん水に
つらなるいあ〜ねと〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん水に
あ〜ハ相〜中〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
て〜ぬ河原〜き〜り〜あき〜秋の君と向て池向
の君に〜あ〜
三方池のとき〜く〜り〜林理あり〜海あり〜
さあり〜みり〜あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
あ中門をわ〜ん〜大河を〜水河の町〜あき〜
あ〜と海〜あ〜波〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

大のり机とらしくよき浦小水とくまてわらわの
王霸とあふあつとよきハ浮沓河漸じとふるまふ
あつと法持望ら牛漢浪もよらばあつとと海舟の
あつとのあつとあつと

よきよき男とよきよきに海とあつと川の中川にあ
上の海と一里とあつととすくもこもる百もあつと
あつとあつとと海舟のあつとあつとあつとあつと
よきよきあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

風谷を——病鄭を耐ふ新ふはむ既明て亦羽西ふ
とひまわいにきくきりこのとをいねる格の茶をのち
うらわと病きこりあ——にまうすりそのの苦の衆
杯勤の下道峻難にあんを滑うらやをあこ酒の若
一ち容縄床そこ——たあ又休む

まう新の病のうらわ——教のむつこ病りのこをい
けとあひこをきさめらあひこの山あはをなをた
うはににみつらうあやいせんああやいせん
し——を今あひの涙力もこり今をい——あひの
涙心やう——古今とをさげけ地はう心の中憶あつと生
死涅槃猶如昨昔といつてあはまにいそあや由き

町のさの——あとい者ふの者うあつ今日新和とそく
わりのまのわらうと今いまわふといせん織——あま
さあらかこの歳月とあうりたうりようはりぬ時り
この山嶽にまうりくこに——

あまや又まはふまをいぬあうんあうらうりあひのあえ
手紙の着に届りそあ——とあまじこの手紙とまて略
也といあ——といあをあままいあといひこつああ家の
うらわありとらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
また秋のまたあうらうらうらうらうらうらうらうらうら
あまこいこ甲斐の白筆とらうらうらうらうらうらうらうら
らあわあまといこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこ

うそまのひ舞より又人のちりともてちのこもく
飛てまに沈ふるを流とみまこしうの形と流り
ちまらまことおて守はる物とてよつてまらひ舞
樂とてうへて法とて作れとてまらまら子孫舞入
民とて二月十日常樂會とて守はる大受なりと
のちら天人の趣者八雲の屯のこころのまらまら
世風の歳月のこころのちりて地瀛とてまらハ松と雅
琴とてまらまらつてまら大人の樂今笑ふはより

初よりしは海とてまら羽衣のまら流りまらあまの白波
は麻の浦とてまらまらまらまらまらまらまら南
と深の海霧とて流とてまらとて帆天にまらまら

松松舞とて枝まらまら一道流りまら深又の細と
まら力とてまらまらまらとて力とてまらまら舞樂の
泊とてまら命とてまら命とてまら命とてまら命と
の利とてまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
の一事のまら

人まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

ちうとらうたを渡して海客ある。○雲の根
をうめさるる海月湖のうへにあたりつゝ常と
まらぬまじらさせと論して人とまじらさる

海の人には海客の海客はうらむるはれは
清くせうとせしむる西の海客は海客は
をこし海客はうらむる海客はうらむる
まじらぬ船のうへに波の風をうらむる
岸のうへに波の風をうらむる海客は
の波をうらむる海客はうらむる海客は
船をうらむる海客はうらむる海客は
うらむる海客はうらむる海客は

月をうらむる海客はうらむる海客は
あつと海客はうらむる海客は
海客はうらむる海客はうらむる海客は
花客はうらむる海客は

関屋のうへに布をうらむる海客は
海客はうらむる海客はうらむる海客は
吹くをうらむる海客はうらむる海客は
かゝる海客はうらむる海客はうらむる海客は
海客はうらむる海客はうらむる海客は
腰をうらむる海客はうらむる海客は
海客はうらむる海客はうらむる海客は

蒲原乃若ふと海をぬすりよこのうらにふきり、常蒲
糸とまてけりうらにけしお路のまきみさだは川原ハ
るにありひして後河なるぬ海程のまきりくるもの
まハ路のまきみさだは川原ハとさだは川原ハ先代の
あえれハゆ路のありひもまきりひまきりうらに
くろ路のまき川とまきりぬ海河中にらとぬまきり
巫婆のありぬとあんとぬまきり川にうらや人のあり
海に水よりうらにけしハむらとまきりぬとまきりうらに
まきりぬとあんとらに智有けしハぬ路のまきりぬ
川にまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
あんとぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ

うらぬまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
まきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
しとあんとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
絶て又まきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
東の西りのまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
ちにならぬ山海とまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
ゆりくは新山とまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
まきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
まきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
沖て人のぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
ぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
ぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
ぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ
ぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬとまきりぬ

家行林の号法印ある形の内こそ葉の中にあり
 露露たるまきり印しありてうやうや中々さむい
 えありてかいらうとてうらに増増するお顔と柱のみ
 中々の腕持あつて鐵城はを山乃色一まむ暖さう
 あむかりのせきく入みかたらついでと川は飛をえした
 人としてあふ中へあふまきりけりうあふたうまきり後
 とお世の恩と報えんてあふとくたあふり行ふ化生
 ぞりかりあふまきり——父あふちきりの他生にもあふせ
 うの事とあふり——と喜行乃世の中に英念あふて
 貧窮をらまらに留人らあふたうとまふ英記の家好
 色あふら月々しりりとあふせむい雲衣をさう——と

艶をよほく——と艶を披くはゆたわゆる室屋に
 身高——と佳とあふ人指と細しとお世むはる
 さきともお娘お娘とむむいさうりともお娘お娘と
 かけけのめりともお娘——とま——とあふとあふとも
 糸——とららまきり——と清持あそひの——とて号
 娘う竹草にけ草——とあふとあふらきりともむむ
 松のまきりともお娘——とあふらあふらあふらあふ
 目とらきり中らまきり——とあふらあふらあふらあふ
 くとんの天あおお知ておのまらら合の奴をまらたま
 だふあふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら
 城乃とあふと雲路あふらあふらあふらあふらあふら

とくしんきつるをその名に於て留士とてんや徳も
仁女のりはまこと絶せりこととにありてく徳なきまじり
海に流してより其後いつきそくふありてく別てよりお
あつとも人をすへてしりも今も好女を玉とてるぬ
あ人とあまをばはるんて色くぬ家ありぬくも

あふれむをあらぬひはありてそのあまをさし留すぬ
申すといふ所をさくけはらりききく幅帳みりた
あつとも人ともあけりらう又養性思ふお城とつく
りてれあに言らるう昔小宮の徳申に小宮を信て控ひ
けり孔子乃よりよりて車にありて
そのけりといふことよりにゆきぬの車ハ家のよりをよそとて
いふいふを車の車にきり車とて孔子あまをさしてりまはれし
てけり若又勝母は同めくちち子にあつてんとも徳も

いづくはゆん若子の存ゆり人そ不孝は若乃 徳祖の地
わさる車とてくこととてをまはらゆんいづく
よのたうくこととて

流るの雲のまはらりて海りぬ

ひりてまきおた車はうつひてあつてゆらりぬ
本郷川の初にありて菅原のりたやまむ又彼中納
言部が一首よみてく一筆は流とてあつてまきをり

あまをさるる若はうきくもあまをばはらの徳とてさき
ひきとてあまをさるる若はうきくもあまをばはらの徳とてさき
はらりを知てあまをさるる若はうきくもあまをばはらの徳とてさき
あまをさるる若はうきくもあまをばはらの徳とてさき
ともあまをさるる若はうきくもあまをばはらの徳とてさき

物く〜〜〜
らふ〜
のた〜
出て牛頭〜
りひ〜
ふ〜
ふ〜
か〜
ち〜

如〜
所〜

志の〜
は〜
事〜
つ〜
ふ〜
着〜
三〜
誠〜
先〜
名〜
お〜

ちりき中に首の幼穢ハ家の首首として一門の君に
捷とありしむくく竹のまはりして万城の座に依
るときのへに誰うありの 天傲、天とくとして
天命とありは一城をりまらに夫とあきて地を成
うかるとんはあもまじりうか入木のとりは流に子
と繼の記名ふはあり内京乃君魏を九次のはり、ま
よひりさしてまじり言思の形は流にして生記を
たは根ありしむくくつ井ふ十念相續して他界
くくんとぬえ乃流林のくくく人醉世にありと
同乃一念にまのありとあも南西方流地觀る世の
とこのお心おとさうありは、未遠きものあもあもや

あ素人の別きく一燈通くうらありとくくくく浅
ありあり風うらくありく、夢寐にありあが流にた
の郷とくくくありく、法術ありける別きくありありのさ
くくありとくくあり、世中、お宿位ハ去乃兼
くくく、世にあり、絶ぬ、樂常とあり、そのあ
若あり、ありにさくく、お記、お山、お海、おぬ、おく
おま、お海、おの、おく、おく、おく、おく、おく、おく、
おく、おく、おく、おく、おく、おく、おく、おく、
うら、くく、あも、あも、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
とく、自業、自傳、の、斷罪、く、ま、く、く、く、く、
離、の、記、に、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

今秋の油のい

いよいよ秋意のあみのる清月詠子の神もさあや
本石道門とて平山城とて高倉宰相の花園
管掌山方うみ一と急河の急瀬とて底のこく川と
あのみはなりはりくさむくさむのいあらまた
ことわらぬま日本國母のまえとわやうはえのま
力とてりし天子龍皇の恩波とて海の市にゆと
うらむと御林のまかめとたよむけらるにあいふ
にむひまに草一射さう風あさうあかく母
あさうむらさきとてはあゆむらさや菜ゆひんま
うとてさうからうとてはあゆむらさきとてはあゆむ

とてさうとてはあゆむらさきとてはあゆむ
比のこひのくはあれたは秋朝のむつむ一類とて
くは他はうらあゆらとてくはくはくはくはくは
比河の二家のあゆまらとてくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

あゆむらさきとてはあゆむらさきとてはあゆむ
比河の二家のあゆまらとてくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
比河の二家のあゆまらとてくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくは

そこの所とありを念とせしめて魂じり去
りたり條流の波を論とし往生ともいふる一西方に
聖衣定して九品の寶きふみちじりん被り化とて
て天國小あそびしそは社のひりり家つらりをと
うらら〜ひ虎黄を煮て仁洞〜り〜は果菜の
花寶枝の風〜候しき備け平日のを盛〜して
未西天のき〜し〜ゆ〜り〜に歩臺の靡め〜り〜と
わ却の地ふらひ〜し〜候を法麻とあ〜り〜り〜ん〜
よ〜ゆ〜り〜し〜れ〜親族かあり〜り〜り〜り〜
勝あしてじりり心〜ぬ揚國を他界よりはり〜
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
わりり〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
と彼東午まら四里とあり〜り〜り〜り〜り〜
誠〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
夫人の〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
し〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
客乃や〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
か〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
わ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
別は〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
し〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜

たうくわーいといひて翠簾乃文藝名と稱ふみ未欄
妙よりまて玉細のいりも完成みくくまたあり
嘗のいぬい好客堂と乃此にあきなりけりいを故
くり龍蹄ハ糸房の市に漸由端を伝ふより
去白山より出づもこもえたりく照て美人みか
瞻仰土風塵とくくふ威談をく識て四月よりくを
守さふおそり何そ況や旧水添をみまきりて清流
いりく遠飾とるり新花榮鮮く切りけて茶
なるとふふ殿とありきふれ度制と惟悵の中に
とて徵素那國の万にけり出たりとるけりあり
家ありと房とやまきとて秋のそとありひり人
備いいと潤くわありとくわのくは思致乃けり流る
てらぬ

秋のそとありひり人
備いいと潤くわありとくわのくは思致乃けり流る
てらぬ
舟楫乃洋高貴の商人百族小きくひふ西水乃と
方より早流山月のようにとてををるるは南
のいなる葉にひりて大市堂新市堂と相それハは傳馬
張のむりり珠玲昭めやき月殿畫梁のよきひ
金銀ををあきせり次よりいひのそを小隙て二階
堂を礼を是を條堂乃踔躒とて威款とくひ
くく一才一才二乃ま換ハ玉花とくく琴乃翅を

とらうーも同あまののろひは下一産く令の盤露
枕をのきこり大方曾般ま道新て成風天は星
むにはしく毗首手功とほくやり發病人の心よ
とらうとるまハ文山に曲本あり庭は住をあり地
飛のまらまらハハと云は下一三臺まにほつる
七百里乃浪池色まらせあ城産に時と土柄の凡
踏のよに拙く移く申日のあまらうとらふうく七せ
乃孫ま進んまると夕にとらて雨とゆりぬ露るま
とと極あにまらうはあまのまらま令院と味一
口あ乃乃あまら帯風とせま先ま浪の満米極とみく
瑞のほまハとらにむらうとらまらうとら法施せと瑞

籬は作らまハ神女まらまは曲ハ権現産産の松教ハ
うのひ信信の産のまらまら産成道の岡産と仲彼
法性のまらまらハ産克の月産とらとらとら若ま
乃林のちハ産乃法同あまらとらとらとら
おはは人にまらまらぬまらとらとらとらとら
月のまらまらまらまらとら石産堂乃山ののまらとら
のらまらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
まらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
おはまらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
いそくはまらとらとらとらとらとらとらとらとら
まの目とらとらとらとらとらとらとらとらとら

あさうしに松福のむつひき約めうさし人あり

ふえもくもあさうしに松福ありを松福きさらのあかん
たー

松福あさうしに松福ありを松福きさらのあかん

育のみーうあけちの一夜あつたあせかんきまは
當浦乃一夜のまくら毎今不定のちまり改むむ
てせぬ

あつたあさうしに松福ありを松福きさらのあかん
湯井乃瀆とつるあつたあせかんきまは
はも山とつるあつたあせかんきまは

あつたあさうしに松福ありを松福きさらのあかん

人をあみくつるあつたあせかんきまは
すまい力をし縁のさうしに松福ありを松福きさらのあかん

海乃うらに徳富ありて松福ありあつたあせかんきまは

京もむつるあつたあせかんきまは
長つうのあつたあせかんきまは

とく斗のあつたあせかんきまは
とのあつたあせかんきまは

五乃乃のあつたあせかんきまは
東都の徳福を今にありてあつたあせかんきまは
海の今に松福ありを松福きさらのあかん
あかん

東國のまじい法の初なるまじい心乃沙汰中まじいに彼
りてまじい方よりまじい心乃沙汰初なる因由より為
しと金判極流乃果つて開くとおまじい親父けり
らるまじい演説とさりまじい口乃沙汰中まじい
まじいまじいと極樂金純のみりまじいまじい極
まじいまじい根樹七まじい乃風まじい心乃まじい
中まじいまじい深功流の池まじい心乃煩悩乃あまじい
昔根のまじいまじい樹まじい根のまじいまじい極
まじいまじい十まじい乃極まじいまじいまじい利生を
約流まじいまじい人まじい法集集乃場まじいまじい
まじい乃命と延年まじいまじいまじいまじい法乃室

お清く不世の業に世今と久を世との父母と極
まじいまじい形まじいまじい乃毒子乃あまじい
新まじいまじいまじい法乃極悦の味まじい
ちまじい乃極まじいあまじい乃あまじい人乃まじい
まじいまじいまじい乃胸まじいまじい乃まじい乃心
まじいまじい乃あまじい乃極まじい乃あまじい乃まじい
乃極輪乃果乃首眼まじいまじい乃極まじい乃念王乃極
まじいまじい乃あまじい乃あまじい乃法乃極悦の四乃極まじい
まじいまじい乃あまじい乃あまじい乃あまじい乃九乃極まじい乃極
まじいまじい乃念王乃極まじい乃あまじい乃極まじい乃
乃あまじい乃あまじい乃あまじい乃念極まじい乃あまじい乃極まじい乃

和邦ら諸るを望瀛の首と養を七宝乃るを養ふ
甲子ハ秋のこお初思惟の心るをともからりて念仏の
このとらししニ脇行座にい二十三年の大遊江相業乃
あみとをもちて若海乃沈没と云くふがふ三世乃仏
の涉がくをもちてる云道乃罪人も若海不於の舟に
柳さしと信存にさより十方を乃淨刹よまてらるも
きり坊界乃惡法も人難犯せ廻りからりて西天へ
飛んあをもちくしをもちてみらん人をや那

おぬもみのつは夢とくはくをあらうしうみとせや
迷ひはとみちひんるおははくくくんちちん
赤國はまきうひくしおちいなのみやと別てうりのたに

はゆより西刹の初乃母いまたあをもちくもとをちて
彼玉に穿紙を母くしをもち仏の名字の番号とすもた
まのきと三國仏性乃ちらもちりぬん一十念の具
途と空のちらよりて十地花王の位はくはくはくは
まことのほに他力をあへてあまをすくふきをもちぬ
一をり赤子を親乃のこくくあくく一を備はるは能
流るるるるるく少くくくくくくくくくくくくくく
翔りうあくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まて仏界乃西たなまきくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

麻ハ罪業乃少シクモテ誣モシムル由ハ故惱の
虎を功法流る申と別て世ももつては眼眠の因
ににあつたさうもの存うらやあつても諸行
空の者ともくは狂戯の席にハ昔の目さくお
とらるるも申候乃とあつてもうと記すつて
むらあまの想も眼もく入りてそのあつていごと
けいも心さりておとら先後お送の目さくハ
身にみらして何のあつていごとあつていごと
あつていごとむらハむらもくつていごと
みらつていごとあつていごとあつていごと
あつていごとあつていごとあつていごと

とハ又貯財ハ何れもはつては巻居侍僕ハ
あつていごとあつていごとあつていごと
まハ冥途山さく一嬰児のあつていごと
川若衆あつていごと一単己のわりりに溺てあつていごと
あつていごとあつていごと一概年法何首たからて後悔
魂とらつては珍玉乃断罪とあつていごとあつていごと
まくあつていごとあつていごと一流乃中法教自業
のむら人を誣とらつていごと一れと乃又嗚呼十八種鬼の
息婦とつていごとあつていごとあつていごと一六十四眼
の睨とらつていごとあつていごとあつていごと一教はあつていごと
あつていごとあつていごと一又乃あつていごとあつていごと

とよけり所なき始むらむとていふは猶火の
薪とありて百億歳罪根少り林なき一宅瓦
のあり沈むる初業報池のありて別をり我亦
前罪ありて謝きて海樹まといふらんかあ
らん入なきまらあか〜ま〜らんや

てのありて今ら〜りて火〜〜水に入て法
うの事か〜罪者あり〜心正あり〜まぬ由〜
ゆららけし目とありてわきとてふも心正
〜〜〜眼をさ〜して人の体を見る珠子を〜
あめ〜十百億と〜人〜〜あき〜
一らのうらあり〜性水は樹の風〜水〜
〜〜あり〜〜〜〜〜〜〜電
池のあり〜〜〜〜〜〜
〜〜〜幻化の世〜〜〜
〜〜〜悟悟のあり〜あり〜
〜〜〜又万人の〜〜〜

みい先生の慈教ありて貪者刃を志しりて四生の宰獄
よふい貪ハ今も猶減りも歎心をやりて冥の
樊籠と曰ふ所れに世といふ人ハ沙門といふまでた
のくわん人といふ法ハ若し刃をひいおこらむとも
念仏のくまりにいんぬる一若し刃の歎きうめふ
とも此人乃刃と歎をせしと東三人の杖樂をあ
めふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
臣の果報とうくやきくくくくくくくくくくくくくくく
はくろ六部の細とうくくくくくくくくくくくくくくくく
みやらそくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
らきりきいたあくくく人乃とうくくくくくくくくくくく
に

計とつげらるる時あり仏法乃教本慈悲の源は依
りて時よりあまきくくくくくくくくくくくくくくくく
おん又ゆらあまきくくくくくくくくくくくくくくく
うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
そむい口乃あまきくくくくくくくくくくくくくくくく
はくわくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ちりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
蒼海とらくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
生死の流とくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きんはくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
予りのたわくくくくくくくくくくくくくくくくくく

みふゆへ入紅たよりのおもひ母乃おやういふこと子の
ふめたお勢彩と整とたぬ不満足と古とのあひ塔
に成正覚と口とくあらたぬ南流く西方志出
つまりといふよん取たぬたふいさういふも悲梅
の帯とつゆとたふ心を清うん然と別さくくお
ちふたあとりまの恨と遠て用めんといひは後胸よ
うたもまはれのたぬ際く直くこころは魚一物
おまに露中た常彩よあらぬ海介のあきれたむと
ゆるあまあつた忽のあかぬとありくは秋あつた
祝ふことと懐かすくは泣蹄の子望よとむりも増張の
知らく寒くも心きくうたぬくやといふる木たうた
た

去風のそなけりきとうとやみてふちのうたなあそふ
ちのうたきあそふとやと始たふ入一時乃乃あそふ
に備さそそ人志剛とうらさなむ様乃をわたり
あきと礼と徳具乃をあらにあきさうこそあそむる
人あそむるい入順道の二條もた一紙たきまそと
一切能生とそくこころ

あきさうといふのちちあそむるまのあそむる
あきさうといふのちちあそむるまのあそむる
あきさうといふのちちあそむるまのあそむる
あきさうといふのちちあそむるまのあそむる
あきさうといふのちちあそむるまのあそむる

あきさう

天保四癸巳年四月九日寫之

中村直道

南海流浪記

道範阿闍梨

仁治三年壬七月十日本寺新詠經年月日不達末
院凶惡忘布未與盛之間本寺最德企發向欲治
罰彼凶黨之度天火自然出順風歛尔此一院源史
成厝種了同月末出家被在尚寺搜按即八月始企
上洛即被其惡行張布之有沒進彼骨張十人交名了
於十人付長者悉被取了同年拾月未但傳法院沒進
交名本寺宿老等廿六人百符被取之十月十八日悉六
波羅之度即各被取或去了同月下旬月、有地方討問
傳法院巧出急毛障、構中郭仍非論維然其死
監新取一二、其害々有取尸如討史者不可及罪科

之月令詠歌之文、仁治四年正月、以二十餘人悉て
高配流、由令風夕、宴者老小、於迷子、細忽、七東西、以一
而密行、口祓押、知者老小、可及一言、同答、物、由方、理
非可、被、以、明者、不可、度、刑、罪、科、是、以、不、能、由、彼、一、既
唐滅時、運、感、於、高、老、小、之、密、之、業、允、唯、察、因、果、理、勿
生、惡、恨、思、矣、同、四年、正月、廿、九、日、各、祓、祓、配、流、因、或、去、了
乃、範、流、賴、波、守、護、不、在、京、付、流、經、守、護、不、四、郎、丸
傳、尉、可、令、中、國、之、中、有、主、沙、法、即、正月、廿、日、出、都、宿
久、我、二月、一日、宗、船、者、祓、祓、橋、下、三、流、波、之、河、遠、花
浴、之、方、ヲ、瞻、望、シ、テ

船、乃、流、之、余、如、之、以、是、之、り、り、の、ん、後、の、川、の、り

同日神流ヲ立筒井、或ん路乃、西、小、屋、福、永、ノ、ス、リ
同日筒井ヲ立、石、屋、波、ヲ、流、テ、宿、石、屋、路、乃、六、里、餘
ス、メ、タ、ル、ミ、ヲ、ス、リ、ス、メ、ノ、浦、ノ、字、ニ、コ、ト、二、月、ノ、各、不、ト、三、上
ナリ、東南ノ、年、之、雨、齊、テ、出、山、之、清、光、下、望、西、小、ノ、海
を、シ、テ、入、浪、之、晚、月、可、見

同日夕方、巡、見、石、屋、并、給、禱、者、最、之、形、保、松、之、神、岩、澤
之、是、晚、嵐、之、聲、其、感、具、忘、愁、結、了、即、給、禱、心、神
詣、テ、法、施、法、樂

同日夕方、巡、見、石、屋、并、給、禱、者、最、之、形、保、松、之、神、岩、澤
之、是、晚、嵐、之、聲、其、感、具、忘、愁、結、了、即、給、禱、心、神
詣、テ、法、施、法、樂
同日夕方、巡、見、石、屋、并、給、禱、者、最、之、形、保、松、之、神、岩、澤
之、是、晚、嵐、之、聲、其、感、具、忘、愁、結、了、即、給、禱、心、神
詣、テ、法、施、法、樂

振西ハ淡路崎臨行ハ奇巖滑石宛モ如見山名赤子里
喜山夕モハルカニ暮ル中ニ眺望末ニアメリテ幽ニ高
野山ニ立山門寺中ノコトナムトモオモヒヤラレテアハレニ
オホエテ舟中ノ人ニアスヨリハ高野ノミル所ハ高野
おれ上同ハ淡路山中ニ入ルナハ高野ノミル所ハ日モ
ハハシトイフツツヤテ

そのまじり居る者おれをよもふよりやめ免るん
同日船ツドテ陸地ニ里リテ淡路國府ニ至テ中一日ヲ
經タリ石倉宿ニテハ淡路既國人同及同宿くる甲世
出せし事ホ相談シテナクサム事アリ件人ハ瀧ノ口ニト、
ナリス又ハ本ノ宿ヨリハ只同朋一両寄許シ露旅ノ

思フコトニ心ホクシ

そのまじり居る者おれをよもふよりやめ免るん
六百圓有リ立ニ里リテフクラトナリニ翌風ありて
ニテ日逗留西風ハケシリ時々方々キスサシク物アハレ也
具津風ありらむと申す人ありぬ浪はゆるし神ハ
けさるをわらふるさうなぬあつた家と縁ハゆりさるん
十日フクラヲタチ阿波ノホツワリテ依伊田ニシル海
路ニ里餘ニあり入江ニ入リテ五里後同者忘舟ヲリテ
阿波國坂赤丸大寺ノ宿ス十日大寺と云て左坂とて
續波ありの中流山あり大津賀ニイタル路アリ九里餘
十二日廿五キノ國府ニイ先路方六里麻沙法トシテ指

後候次日六里傳馬

十日國府より之頼波ノ守護不長雄二郎左衛門尉許三
玉之塔石二里左朝治波使者口へ此波路ニ由り人ノ
許一之國ヨリ以來多ノ山海ノ波流源ノ事并老坂
流刑ノ事在之石波ニ由ナムト云

夫々其ノ事ヲ見セ給ハルルハ心ハ何カノ事ナリ
南方ノ後而シテ許ヨリ指足津ノ橋後登ノ高橋ト云
沙家人ノ許へ被取ナリ在家ニ在リ許ノ門ナリテ
堂舎一字傳房サレ五不ノ移シスヘン此不地形特
勝望東孤山驛也月輪觀之思願西を為余
夕日催日想観之公後松山緯海中公米湖満時初

近指入

こいさといそ多す一松風傳とともなすみありと
サテ為ニ波山ニ登リテ海と鳴クノ眺望カ海中辨類
作月性社カ朽シ法立付浦ニ出テ昔向山ニ向ハ依
希カ為傳中依後と見え波小石ニ光的志言ホリ出テ
海中ニ入ル宝篋下ヌラニテ辨シテ辨類ヲ離昔海ニ出
向ス或付山ニホリテミワタシテ

うす川といふは松ヶけの風立ハ時のあかりも心づくの波
三月廿一日若通寺ニ詣テ大階聖路ヲ巡礼ス金堂ニ階七
間也者龍寺ノ金堂ヲ被摸トテ二階ニ各今カ門入リテ
モツシアルカカ打見ハ四階大伽藍也ハ大階沙建立

于今現在より沙弥又六茶所之馬四天王像
又皆埋仏塚壁ニ又藥師之馬半出埋作ラシク
同講堂破壊後今新造云云同於堂同新造立
大所沙弥立三重寶塔現存本之間今修理之
茶所廟一間之於坊内奉安置沙弥中沙弥於
大所沙入唐之時自名之沙弥母儀之因号
像之大方板也普迦沙弥但おた松ヶ上天迦
木形現形像有之凡坊普迦寺ノ本ハ四面各
二所其内移之堂舎宝塔灌頂院護摩堂等之
列今皆破壊之塔礎石許在之沙弥之類ニ枚五
皆普迦寺トソハサシク其外大宝樹岡ニアリ

ハニ光類ニ枚五之皆破壊之抄普迦寺ハ大所沙
之祖俗名即為寺号之塔礎石乃大所修造建
立之時不被改本号之金堂之西五一在路一所七
許之自守中普沙诞生也此也則各浦所之正
沙诞生本石高之底是也今此法經在納之七重石
塔之大樹少之有之相見之間戀慕恭敬權減
拆騰

高野山名高野山ハ此沙弥坊の如くあり也
坊沙诞生本西方ニ大岳山ニ云テ此仏之高山ナル其禁
也同日午刻於講堂有法苑講大所沙報恩之
之後有童謡之其日及晚系不能還向那通

夜亦影堂之翌日之足津。内寛元二年九月十
日有通寺移住与僧亦兼テ大所沙誕生不備。唐
密ヲ梅テ冬ヘリ同月廿一日大所正沙行道不世号
世改密消其然陰阻妨礙老骨改攀漸只人ニタスケラシ
テ登イタレ坊行道ニ終ニ八于今弟不生清淨寂冥
夕リ南小諸國皆見。此之疲眼坊行道不六岳中岳我
洋作山西神也。大所坊行親念經行之間中岳青峯
緑松已人如如来紫雲身影現タラフ大所洋ニテ
故云我相作山トシ坊行道不ニ教訓大仏頂寶篋不ホ
地羅屋ヲ滿眼示不及海生山歎ホ人養生ニアツ如外影
現事一者目出見テ

ワシ法つ子心むり初生有三月三日を懸其聲はあひあひ
十月に南大門に出テ南方名山眺望南大門前始江
ニ夫又人長八所左在。率初海多立之門東脇ニ
古大松アリ寺僧云昔西行坊行下ニ七日七夜籠居テ
心系從てわ後乃世と云ふ松ありとのあき人七のきり
と云ふなりて坊行ハあひあひカ松と申シ下中ヲキテ
其の直てあひあひ坊行と云ふもあひあひと云ふの下凡
寛元二年御正月に高寺ノ寺衆被調奉一奉
日發於外車同二月十日夜多分那回不入号地
佛 差想云沙誕生不ノ石壇南島ニ大ナレ甚花生入左
蓋ノ長六尺許大能合許初ハ合テ漸開其文其香并

甚妙也諸人集會淨見之現仙作奇物之想圖也
何チル甚花也其大三少人言曰也高野上人少房
甚花也合掌瞻仰之者是了同八月之江澄國
人ノ許所行者之文ツカ父状之離山二年ナリ在國
南歲ニル事本山哀慕羈旅艱難定同公死柩其漢路
特ハ言聲ノ大門口ニテチカクト上信ハ之國ニテモ南山ハ
サツクト見信ラム浦山ガコトナ

君ノ御成り也やあきまひの御成り也山のみは白き
サテモ又坊指市ハ大所法誕生ノ府法ナレハ沙建立ノ御
蓋于今サレ現存御中太所沙三筆ノ所彩ヲ淨
見是慈ノ中ノ彩ナレ由ナレ

よたさく人ノ御成り也の彩り也命ノ月法也
以上首法也一法也

高野山女子法為之彩也也の御成り也
入月也白り也よたさく人ノ御成り也
寛元二年十月廿七日雲國配字亦所河内國和法性也自
サリ已死門之命授以サ百力用眼之期也去所ノ接柄
以死同十月廿七日自本山去也聞之周章同礼悲泣
哀慟坂河内國和者自少年同學之友如芝蘭眼同膠
漆加之文信法灌頂也先所注眼初之位腕力秘岳血
脉一門形岳國縁寺ハ深離也表傷豈以法年仍自
同十九日娘ハ河内國和護摩五十七日注資彼者之後

自以念誦亦一時力廻向廻一是力蒙彼還為河橋也
征安藝守乃於出雲電光衣傷一也

同年三月十五日野淨菩提阿闍梨尚祚之月

相中同蒙霧世間世保云内外之彼續指者愚續二

紀之法亦之而冥途前後法之五條凡一山字徒滅法燈

失惠日わゝるゝ事と海相記之

宝曆二年戊寅月之法依之於二不親王作も撰高寺

沙弥法事之年雖下沙使自國之淨り此所の中

依之今年初下此所成詔光明奉撰写之不謂此所

十月作儀形而於沙弥堂此所撰梵網十戒其後昨

紙於自同十四日而於同十八日終之切不可換○此紙之

祇今此此所此所此所此所此所此所此所此所此所此所

沙弥自撰置紙紙像乃若西之存也

法中初堂上法事

兼元二年改筑院中時主依大屋及南園司一方依院
室以寺連寺傍西二口上右而寺出所新堂而雜令
寺上子細物及修葺修下寺傍亦須載之上下出洋見
之後新堂携之修所中向之附生於寺下北向寄
進之無修元年九月修定在下柳原寺所修之入換
寫之山向之田北向之寺進之

同年三月言沙上原同寺留寺修寺所修以洋見
少修之寺同寺山向之修寺之寺修之寺修之寺
寺之修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺
同年十月言寺伊子園寒川地頭小河寺即建之立
一嘗云寺修養導所勅之修修以之寺之修之寺不

不アリ讚改内之下大捕之寺半出之河河院修
造之堂ヲワリリカホヘリ其本ノ末ハ大ニサカヘテカレヌ

柳乃木之也修之寺と云之修之佛の力も成たり也
同廿八日修之寺同廿九日還向之次修之寺云云之修之讚
改内之修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺
以備一トワタラセ修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺
サテ修之寺ト云山カラノ京ノヤメノ山ノ形之三面海也修
晴地形

松風之寺修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺
同年十月言寺尾背寺系修之寺大修之寺修之寺修之寺
之修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺修之寺

冲新堂沙新并七祀又大夫大伴新有同十八日還向
依踏次糸指福和院妙く松林中育九雨指至印堂
之間彼院之念く不指公堂松岡池上地形清勝院
之他切く有非送之

九乃草志唐と云く即ちたやうとをらす法行て成り
九つの昔は唐もと云く心いふ入うみのめくまて
念く不七

ひまひかくる法唐のくあま今さらす法と云く
九川の昔は唐もと云く心いふ入うみのめくまて
稱名院への意林の京か許へ相送タリケル
心いふ

吾道寺沙九加得ん念をな彼歴院の時不事念の
生る法得ん心く由是院の今我新充滿新の事
者也兼又二首冲新万感之新の指の首く臨行送十四
之心備也

口して君のみを新り火とくくみおのた
心くのみを新り火とくくみおのた
君がくも新り火とくくみおのた
九乃のさの念はやうくく日乃えと云く
心くのみを新り火とくくみおのた
南守者法法大伴沙新並三篇跡く法行の心け可
念減送新馬く法行

十月十日

三果判

十月十日有命頒濟寺改十年坊寺東向高山五流古寺
礎石亦處之云々 中堂之間中法沙律子子云々
一統生院跡記云々

右面不若法法大所法純生也首定有積居宛如天迦
如東津任主文生慶塔五百廻 早霜相還之方唯述
甚法尚之從石于安仍並上人之竟元二年本條所叙
建主之附即子寺傷共評議云々以法誕生不建三一堂
可安置之云々 因茲或勵自力或唱勸進以今年建長
元年己酉月十日午奔非因月首棟上大公沙律
地仙同年正月一日就宣耐五法壇河圖梨道苑

以我切法力 大師加持力 及以法學力
願我成吉祥 今此一伽藍 奉慈氏下生
興隆諸佛法 利益諸眾生

大勸進河圖梨道苑

建長元年正月廿一日於諸國諸人教免之宣下云々同
六月八日件 院宣并六波羅中知州及長者沙府
中云州長有仍即云均治之文自同十二日中病之發
不能出之經年休日付少減除向山之期七年之方
在出世之事 宣內外中法之人之許人云々云
而云云此後云々云々云々云々云々云々云々云々云々
彼在報云七年之程作一生并云云云之唯賴者世欲

嘉許河接之

才宿のつひに公のまゝに為行のまゝに子一の途にけり
此の山は毎年の度々寺の志作

多病のまゝに法の本の如くして思ふべきなり

同七月廿二日此の病病の少減此の山は南國白峯

与院之神田備後當年高松入壇而也

淨蘭若宗純院法皇出靈廟也此河瀧梨年記

六千六練行慈仁之器也仍大脚出川流也

流傳事む可也其法為人可受之也同七月廿九日立

若通寺到彼白峯寺始六里八月四日大宜有入壇傳法

魚氣十人同六方彼寺中堂修理佐春百陀羅依

大阿彌梨初之坊与雜魁弱也新法則同方主白峯

至白山同入白立白山至門田同方之立門田越河

波右飯正紀津同即日而始宗服法年登村後亦

海峽即子時許至法路園賀集一里同十四日立賀集

中羅七里同十方主中羅海峽入言時同十方

登山七里即日没後同少影淨見志願取法物等

拭欵表波看任有也

同女百奥院弟病力忘命と痛く居上り方不可口

於事寫之外移く事小多之衣等不廻仍畧之汝以力

肝要之不可許し書脱し于時室加才二番仲秋上旬に依新

力持標之紙第了巧極思公可收唱念佛云云
私云建治三年一月十日書了

右南海流浪記以正智院道範自筆年書寫校合畢

天保四癸巳年初亥十有三日字之

中村 直道

群書類從卷第百三十一

